



特別支援学校 P T A 連合会会長

大笹生養護学校 木曾 明美

平成23年3月11日、日本を取り巻く環境が激変した日。大震災は多くの命を奪い、日常を破壊しました。ガスも電気も水も食料も、そしてガソリンも無い暮らしの中で、人間の儚さ、弱さを思い知らされました。そんな中で地元の消防団の方による安否確認活動や、避難所での婦人会による食事の炊き出し、また水が使用できる家庭の方からの飲料水やお風呂の提供等、助け合い気遣う人の優しさ温かさにも気付かされました。

情報の手段は携帯メール。親、友人、知人同士がネット上で繋がっていました。暮らしに関する事、食に関する事、放射能に関する事、いろいろな情報を共有しお互いを励まし合い、奮い立たせていたと感じました。

私たちに出来ることは何だろう？何が出来るんだろう？避難所で暮らす障がい児の方は大丈夫だろうか？まずは家庭にある物資を避難所に届けることの呼びかけ、また子どもたちのストレスを少しでも軽減できる場の提供等、無理をせず、私たちにできることを始めよう。いろいろな情報を手探りで掴もうと必死でした。

そんな中、ラジオから流れた福島市のシンガーソングライターの歌う「福の歌」に涙が溢れ、癒され、勇気を与えてもらいました。「私はこんなにも福島を愛していたんだ」この震災で福島の良いさを再認識し、愛していることに気付いた方は少なくないと思います。

未だに予断を許さない放射能の問題はありますが、今私たちに出来ること、やるべきこと、やらなければならないことは何なのだろう？「福島県特別支援学校 PTA 連合研究大会」で二年にわたりテーマとして取り上げ、参加者の

全員、また参加できなかった方々との情報共有が大切であると感じ、臨時の会長会議を開催し、各会長から意見をいただきました。「研究大会の内容を冊子にして全国へ発信しよう」体験談だけではなく、アンケートも実施し、あの時「何があって、何がなかったのか」それを言葉にし、数値化することによって本当に大切なことを見える化することが必要だと思いました。アンケートでは県内の県立特別支援学校にご協力をいただきました。ありがとうございます。

福島県は特別に、防災計画の先進県でもありません。しかし、経験した私たちだからこそ、伝えていく義務があります。アンケートにある保護者の想いや気付きを読んだ時、福島の方向性が見えた気がしました。地域とのつながり、生きていることの素晴らしさ、何事にも最善を尽くす、支援していただいた方への感謝の気持ちを忘れず「被災者」という言葉に甘えず、自分の足で前に進もう。

これが復興に繋がっていくと思います。

「福島からはじめよう」のスローガンの基、前を見て一步一步進んで行きましょう。そして、全国の皆様に私たちの想い、気付きを伝えることができ、そしてそれが少しでもお役に立てたら嬉しく思います。

発刊にあたり、関係各所の皆様、保護者の皆様のご協力、ご理解に感謝いたします。

ありがとうございました。



福島県教育委員会 教育長 杉 昭重

福島県特別支援学校PTA連合会冊子「震災を経験して」の発行にあたり、お祝いを申し上げます。

皆様におかれましては、日頃より子どもたちの幸せのために熱心に活動に取り組み、会員相互の研修や関係機関・団体との連携を通して、学校・家庭・地域の協力体制の確立や教育環境の改善、さらには、子どもたちの自立と社会参加に向けた特別支援教育の充実と発展に御尽力いただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

さて、東日本大震災以降、本県をはじめ東北の各県、各地域では、今もなお多くの方々が住み慣れたふるさとを離れた避難生活を余儀なくされるなど厳しい状況にあり、一日も早い復旧・復興が求められております。

復興に向けて最も大切なことは「人づくり」であり、教育の果たす役割は何よりも重要です。本県では、これからの復興・再生に向けて盛り込むべき施策への対応を図るため、第6次福島県総合教育計画を改定し、未来を担う子どもたちが将来への希望や生きる喜びを実感できるよう、ふくしまならではの教育を推進しております。

特に、今年度は、「家族や地域の絆を生かした学校・家庭・地域が一体となった教育力の向上」を重視する観点として定め、子どもたちの「確かな学力」、「豊かな心」と「健やかな体」をバランス良く育み、ふくしまの復興・再生に向けた生き抜く力を育む教育を推進するとともに、震災により改めて認識された家族や地域の絆を生かしながら、学校・家庭・地域が一体となり、総合的な教育力の向上や子どもたちが安心して学ぶことができる教育環境の充実に努めているところです。

また、「地域で共に学び、共に生きる教育」の推進という基本理念のもと、特別支援教育の充実を目

指しており、特に今年度は、「相談支援ファイル」や「個別の教育支援計画」を作成・活用しながら、早期からの教育相談・支援体制の整備に努め、一人一人のニーズに応じた支援の充実を図るモデル事業も実施しております。

このような中、平成23年度・24年度の福島県特別支援学校PTA連合研究大会の成果を踏まえた冊子が発行されますことは、誠に喜ばしいことであります。本冊子は、パネルディスカッションで報告された保護者・特別支援学校・障害者支援施設における震災体験と復興に向けての取組と課題、震災時に障がい児を持った保護者として感じたこと、コーディネーターである帝京科学大学教授の滝坂信一先生の思い、また、震災発生時やその後の状況、防災意識、今後の対応等についてのアンケート調査結果をまとめた大変貴重な資料であります。

本冊子が本県の現状として全国に発信されることにより、今後、同様の災害が発生した際の対応に生かしていただけるよう、ひいては障がいのある子どもに対する地域の理解が深まることを期待しております。

結びに、本冊子の発行にあたり御尽力を賜りました関係者の皆様に心より御礼申し上げますとともに、貴連合会のますますの御発展を御祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



特別支援学校長会会長

盲学校長 安藤 俊典

本冊子が発行されるに当たり、特別支援学校長会を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

2年間のPTA研究大会では、大震災以降福島県として何ができるかについて討論し、今年度はさらに意識調査をしてその内容を全国に発信するなど、県特P連の行動力に改めて敬意を表するものであります。

大震災後3年を迎えようとしておりますが、まざまざと当時の様子がよみがえってまいります。盲学校（福島市）の話が中心となりますが………3月11日（金）14時46分、当日突き上げるような揺れと同時に、駐車場から複数の車のけたたましい警報音が鳴り響き、尋常ではない揺れであることをまざまざと示しておりました。校内にいた生徒と職員は全員校庭に避難し、近隣の団地の方々も、倒壊を恐れ本校校庭に避難しており、その後、気温が急激に下がり降雪があったため、一緒に体育館へ避難しました。

その後の職員の動きは素晴らしいものがありました。体育館内に本部を設置し、必要物品（ラジオ、石油ストーブ等）を集め、近隣の方々は、高齢の方が多く障がい者もいらしたため、寄宿舎から布団を持ってきて提供し、備蓄していた乾パンや水等も提供しました。（その後、福島市役所からも毛布、灯油、水、パン等の提供を受けました。）

夜間も余震が続き、暗闇の中不安な一夜を過ごしましたが、翌日は（本校が避難所指定になっていなかったことから）近くにある福島市保健センターへ近隣の方々全員が移動し、帰宅できなかった生徒たちは、翌朝保護者と共に全員帰宅しました。

一方、高等部生徒は震災当日午前中授業のため、帰宅途中の生徒も多く、福島駅構内にいた者は歩いて学校まで戻って来ることができた生徒もいたのですが、ある全盲生徒は、相馬へ帰る途中、白石駅で電車から降ろされ、乗り合わせた男性にタクシーに乗せてもらい、そのタクシーで同乗した岩沼の女性宅にお世話になりました。そこへ父親が迎えに来て、無事再会することができました。

視覚障がい者にとって、状況が変わったり、慣れない環境では自力移動が困難であることが一番の課題です。特に、避難所等でもトイレに行くのもままならなかったとある生徒は話しておりました。

このような中、学校としては4月開校に向け、寄宿舎における安全な食糧の確保や通学の状況等を把握するなど準備を進める一方、隣接する高校が避難所になったため、3月中は3交代の警備等のお手伝いをしました。

その中で、全盲の先生を中心とした理療科の教員は避難所にベッドを持ち込み「クイックマッサージ」を実施したところ、大好評で、その他、警備に就けない本校や分校の女性教員は、幼児・小学生向けに遊びを提供するなど、特別支援学校の専門性をいかんなく発揮できたことは、素晴らしいことでした。

最後になりますが、この震災で学んだことは「地域コミュニティ」の大切さです。普段から自分の存在を明らかにしておけば、いざという時に気にかけていただけます。そのことが生死を分けたとも聞いております。学校においても同様で、今後も地域の方々との連携を大切にしていきたいと考えております。